

PRESS RELEASE

2013年4月吉日

六本木ヒルズ 10周年

～東京の磁力 六本木ヒルズ～

2013年4月25日(木)、六本木ヒルズは開業10周年を迎えます。

2003年のオープンから10年、六本木ヒルズは「文化都心」をコンセプトに常に情報の発信基地であり、時代を牽引する「街」として成長を続けてまいりました。その結果、10年間で延べ4億人を超える人々が街を訪れました。

開業当初より「都市再生」のモデルケースとして注目を集めてきた六本木ヒルズは、「タウンマネジメント」という新しい仕組みの導入により、「街」としての鮮度を保ちながら、時代をリードする人々を惹きつけ、その人々とともに新しいアイデアや文化を発信し、実現してまいりました。

2008年のリーマンショック、2011年の東日本大震災といった社会的影響を受けながらも、六本木ヒルズは、高度な都市機能が集積するハード面の強さと、タウンマネジメントにより生みだされた「都市の磁力」によっていち早くその影響から立ち直り、更なる成長を遂げてまいりました。

また、「安心・安全」を街づくりのキーワードのひとつとして、「災害に強い街」を目指してまいりましたが、東日本大震災では、その先見的な取り組みが高く評価されました。六本木ヒルズの電力を24時間まかなう自家発電や、街全体で行う震災訓練など、「逃げ込める街」としての六本木ヒルズが認知され、その結果、昨今注目を集める事業継続計画(BCP)における高い信頼性を獲得し、オフィスの高稼働率にもつながっています。

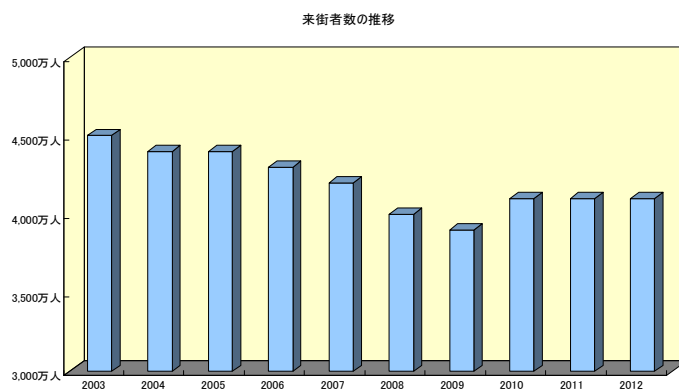
六本木ヒルズが歩んできたこの10年は、都市再生が東京ひいては日本の経済再生にいかに必要不可欠なものであるかを証明してきました。近年ではアジアの諸都市が飛躍的な成長を遂げています。ますます激化する国際的な都市間競争を勝ち抜いていくためにも、世界中から人・モノ・カネ・情報を惹き付ける六本木ヒルズのような街づくりを通して東京の「磁力」を高めていくことが必須です。

六本木ヒルズの10周年のテーマは「LOVE TOKYO」。東京が元気でなければ日本の未来はない、という強い危機感をもって、六本木ヒルズはトッランナーとして東京の磁力を創り出してまいります。10周年を迎える六本木ヒルズにぜひご注目ください。

■ 2012年度の来街者数および10年間の来街者推移 ～10年間でのべ4億人を超える来街者を迎える～

2012年度の六本木ヒルズの来街者数は約4,100万人(平日10万人、休日13万人)となりました。年間を通して森美術館・東京シティビュー・森アートセンターギャラリーの来館者数が好調に推移したこともあり、全体としては前年度と同等の来街者数となりました。

ほぼ毎年4000万人を超える人がこの街を訪れており、10年間で来街者は累計4億2000万人を上回りました。これは、この街が常に情報の発信基地として認知され、10年間で培ってきたタウンマネジメント(後述)の仕組みが機能してきたことが大きな要因といえます。





■ 2012年度 各施設主要実績

～文化情報の発信地としてのポジションの確立～

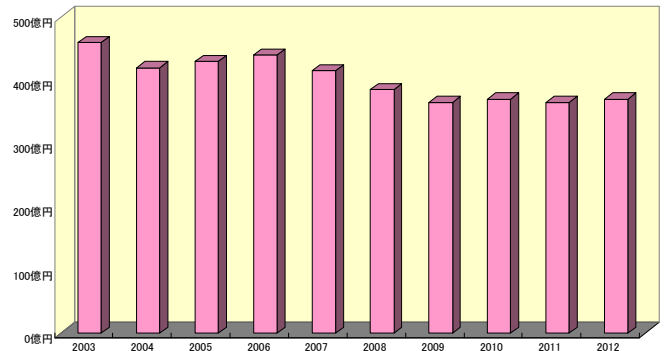
商業施設(Shops & Restaurants)では、2013年1月より10周年に向けての大規模なリニューアルを実施しましたが、売上を落とすことなく推移しており、2013年度にはそのリニューアルによる売上効果も期待でき、400億円の売上を目指します。

六本木ヒルズの商業施設はこの10年の間、基本コンセプトは変えず、社会動向や顧客ニーズを踏まえたリニューアルを行い、鮮度の維持と顧客満足度の向上に努めてまいりました。

その結果、港区を中心とした近隣エリア(渋谷区、目黒区、品川区、世田谷区等)のお客様に支持を受け、顧客化が進み、堅調な売上となっています。

2008年のリーマンショックの全世界的な消費の落ち込み、および2011年の東日本大震災の影響による消費マインドの低迷など様々な外的要因がありましたが、六本木ヒルズは厚い顧客支持のもと、いち早く立ち直り、その後も安定した売上を維持しています。

商業施設 売上の推移



森美術館では2012年後半から立ち上がった「会田誠展」が大きな話題を呼びました。約50万人の観客を動員する大ヒットとなり、森美術館の企画力に高い評価をいただきました。

東京シテビューおよび森アーツセンターギャラリーでは、2012年度は大きな注目を集めたイベントや展覧会が目白押しでした。スカイデッキにてウォルト・ディズニー生誕110周年記念イベントとして、ディズニーキャラクターオブジェによる音と光のインスタレーション「スカイ・ドリーム・デッキ」を開催したほか、「尾田栄一郎監修 ONE PIECE 展 原画×映像×体感のワンピース」(51万人を超える過去最高の動員)や「大英博物館 古代エジプト展」、「荒木 飛呂彦原画展 ジョジョ展」など大型展覧会や自主事業として「スター・クルーズ・プラネタリウム」などを開催し、来館者は前年度を大きく上回る181万人(昨年比129%)となりました。

■ タウンマネジメントにより、広がりゆく六本木ヒルズのコミュニティ

六本木ヒルズでは「タウンマネジメント」を運営の核として、個別の施設にとどまらず、街全体としての視点をもって様々な仕掛けや、情報発信を続けてまいりました。タウンマネジメントの取り組みは、世界から人・モノ・金・情報を惹きつけ、その集積が次の展開を生み出す六本木ヒルズの「磁力」の源泉となっています。

この絶え間ない仕掛けと発信が六本木ヒルズの街ブランドを形成し、街自体がメディアとしての価値を有するにいたりました。この「街のメディア化」による運営原資が、六本木ヒルズの新たな挑戦、展開を支えています。

<文化情報発信>

タウンマネジメントの中の「文化発信」という側面においては、森美術館を中心とするアート、映画館や六本木ヒルズアリーナを中心とするエンターテインメントなど、様々な文化の発信に取り組んでまいりました。

今まで開催してきた様々なイベントも、アートやパフォーマンス、音楽など多彩なジャンルで、常に「本物」の文化を届けるという意識のもと、世界各国からアーティストを招いた「クリスマスコンサート」や「ストレンジフルーツ」などに代表されるパフォーマーの招聘。また、「クリスマスイルミネーション」は、環境問題にも配慮し、開業当初からLEDを採用、当時画期的だった寒色系の色合いで、冬の景色を一変させました。さらにドイツの本場を再現した「クリスマスマーケット」なども代表的な事例のひとつです。

国内外問わず本物の文化体験ができる舞台となってきた六本木ヒルズは、海外からの要人来日の際に六本木ヒルズの視察が組み込まれることも多く、本国での報道を通じて海外で六本木ヒルズの名が知られ、海外からの関心を集めるきっかけにもなっております。



<街のメディア化>

タウンマネジメントを支える仕組みとし開業以来取り組んできたのが「街のメディア化」です。街を支えるパートナーという位置づけの「コラボレーションパートナー」、メトロハットに代表される街全体を使った広告展開、ヒルズカフェ/スペースというプロモーションカフェスペースの設置など、10年間常に新しいメディアの開発と展開を実施してまいりました。

<コミュニティの形成>

タウンマネジメントの最も重要な核のひとつに「コミュニティ形成」があげられます。地区内のコミュニティ活動への参加者は、居住者をはじめ、六本木ヒルズ内店舗及び施設の従業員、オフィステナントのオフィスワーカーにまで拡大しています。

毎年夏に開催しているキッズワークショップも年々規模を拡大して開催しています。店舗やオフィステナントにも参加していただくようになり、バラエティに富んだプログラムが多数開催されるようになりました。子どもたちの夏休み期間中に、普段できない体験や創作の場を提供する人気の定番イベントとなっております。

また、新しいコミュニティのかたちとして、2010年9月に発足した「ヒルズブラックファースト」。毎月1回のペースで開催しています。新しいアイデアとアイデア、人と人がつながる場所として、非常にご好評いただいております。

<タウンマネジメントからエリアマネジメントへ>

さらに近年では、「タウン」から「エリア」へという拡がりも10年の間に育ってまいりました。その代表的なものが「六本木アートナイト」です。六本木全体が年に一夜だけアート一色に彩られる「六本木アートナイト」は、2009年から六本木の街全体が一体となって取り組んでまいりました。2013年3月の開催で4回目となった本イベントは、回を重ねるごとに特に若い世代を中心に認知され、参加者が増え続けています。

【開業から10年、変化した街のイメージ】

六本木ヒルズ開業10周年を機に、首都圏在住の20～50代の男女約500名を対象に実施した意識調査（詳細は2013年4月3日リリース済）によると、『この10年間で最も変化した東京の街はどこですか？』との設問に対して、1位「秋葉原」(21.7%)、2位「六本木」(20.0%)、3位「お台場」(13.0%)という回答が得られました。「六本木」の10年前と10年後（現在）のイメージについて聞いたところ、10年前については「危険・怖い街(24.3%)」と回答する方が多い結果となりましたが、10年後（現在）は、「親子・家族が楽しめる街(27.2%)」や「ショッピングスポット(43.7%)」、「デートスポット(39.8%)」との回答が多く、10年の時を経て、六本木の街のイメージも大きく変化したことがわかりました。さらに、『この10年間で六本木のイメージに最も影響を与えたと思う、六本木の街の変化』については、7割以上の方が「六本木ヒルズの誕生(72.3%)」と回答しております。六本木ヒルズ開業から10年、確実に「街」のイメージを変えてきました。今後もタウンマネジメントだけでなくより積極的にエリアマネジメントに取り組んでまいります。

■ 2013年度 六本木ヒルズの主な展開

10周年に向けて、2013年1月より商業施設の大規模リニューアルに着手し、約50店舗のリニューアルに取り組んでまいりました。お客様のニーズを考慮しつつも、新しい刺激や魅力に溢れる店舗が六本木ヒルズに仲間入りいたします。また、開業以来初めて商業施設共用部のリノベーションにも着手し、今まで以上に快適な空間に生まれ変わりました。

10周年記念イベントの皮切りとなるゴールデンウィークには、フランスの「カンパニーオフ」、ロシアの「シアターページ」、いずれも初来日となるカンパニーを招聘いたしました。もう間もなく、世界中で注目を集めているパフォーマンスが六本木ヒルズを舞台に繰り広げられます。また森美術館では、10周年記念展「LOVE展：アートにみる愛のかたち」を4月26日より開催いたします。

六本木ヒルズはこれまで形成してきた街のブランドの更なる発展を目指し、六本木ヒルズ及び六本木エリア全体の魅力を向上できるよう、文化・情報発信を推進してまいります。

【本件に関するお問合せ先】

森ビル株式会社タウンマネジメント事業部 六本木ヒルズPR

担当：田部、山村、松島

TEL:03-6406-6382

株式会社プラップジャパン

担当：川上、町田、井出、江川、右山

TEL:03-4580-9103



六本木ヒルズ内各施設 10年間の活動内容

◆ 森アーツセンター

① 森美術館

森美術館は、2003年初代館長に日本初の外国人館長デヴィッド・エリオットを迎え、国際レベルの現代美術館を標榜し、開館しました。2006年からは南條史生館長のもと、「国際性」と「現代性」をミッションに掲げ、アジア地域を中心とした世界の最先端のアートを紹介、今やアジアを代表する現代美術館としてその名を知られるまでに成長しました。国内外から多くの来館者を迎え、その数は10年間で約1,200万人に上ります。

開館記念展「ハピネス」から2012年の「会田誠展」まで10年間で37本の展覧会を開催、美術のみならず、ファッション、デザイン、建築などを含めたユニークな視点を創出してきました。活動の主な機軸としては、中国、アフリカ、インド、アラブなど世界の新興地域の社会や政治経済を反映した地域展、草間彌生、杉本博司など今や世界的に活躍するアーティストをはじめとする、日本、アジアの中堅作家を紹介する大規模個展、日本の現代アートシーンの定点観測として3年毎に開催するグループ展「六本木クロッシング」シリーズなどが挙げられます。

その他、森ビルとの関連が深い都市・建築においては、近代建築の巨匠、ル・コルビュジエの回顧展や、日本発の建築運動「メタボリズム」にフォーカスした展覧会を開催、また、国際的なネットワークを活用し、UBSやティッセン・ボルネミッサ等世界有数のコレクションの作品や、ターナー賞、マルセル・デュシャン賞等権威あるプライズの受賞作家を紹介する展覧会も開催いたしました。さらに、メイン展と並行して、開館当初より継続している若手作家を対象にした小規模な展覧会シリーズ「MAMプロジェクト」の開催実績は18本を数えます。

また、地域協働の取り組みとして、2006年、国立新美術館、サントリー美術館と六本木アート・トライアングルを結成、マップ制作などの継続的な活動が基盤となり、一夜限りのアートイベント「六本木アートナイト」の実施に結実しています。

開館10周年を迎える2013年度は、「LOVE展：アートにみる愛のかたち—シャガールから草間彌生、初音ミクまで」、「アウト・オブ・ダウト展—来るべき風景のために(六本木クロッシング 2013)」、「アンディ・ウォーホル展」を開催します。

② 東京シティビュー/森アーツセンターギャラリー

東京シティビューでは、2003年の開業より10年間で、国内外の約1710万人のお客様をお迎えしてきました。東京タワーと東京スカイツリーを同時に見られる展望台として、東京の名所を一望でき、また屋外展望台としては日本一高い海拔270mからのダイナミックな景色を体感できる「スカイデッキ」を有した唯一無二の展望台としてご好評をいただいています。

また、様々な季節イベントや食のエンターテインメントも提供、さらに、併設する森アーツセンターギャラリーでは、2004年に誕生して以来、西洋の名画、浮世絵から、漫画、ファッションまで、幅広く多彩な50以上の展覧会を開催してきました。

東京シティビューは、眺望とアートを同時に楽しむことができ、様々な層のお客様がそれぞれの楽しみ方で過ごされる施設として認知されています。

今年度、展望台では「初音ミクカフェ」や国立天文台協力の天体観測会、恋人の聖地プロジェクトイベント等を、森アーツセンターギャラリーでは現在好評開催中の「ミュシャ財団秘蔵 ミュシャ展」に続き、世界巡回展である「ハリー・ポッター展」や「スヌーピー展」など、様々なジャンルのイベントや展覧会を開催して参ります。

③ 六本木ヒルズクラブ

六本木ヒルズクラブでは現在3,500名の会員が所属しています。「開かれたクラブ」をコンセプトに、幅広い年齢、業種、国内外の会員を有し、第二の我が家として、賓客のおもてなしの場所としてご利用いただいています。会員の6割以上が30代～50代と比較的若く、週末や休日にはご家族連れで賑わい、ビジネス利用の多い平日と全く違った雰囲気もお楽しみいただいています。

2012年には過去最高人数の会員入会数を達成するとともに、クラブイベントを通して活発な会員同士の交流の場が設けられました。年に10回開催しているランチョンセミナーでは竹中平蔵氏や写真家の篠山紀信氏、ジャーナ



リストの手嶋龍一氏や CCC 増田宗昭氏、元日銀総裁の福井俊彦氏、プロ車いすテニス選手の国枝慎吾氏等幅広いジャンルのスピーカーをお迎えしました。

また、ゴルフ同好会定例のゴルフコンペやグランメゾンのワインメーカーディナー、森美術館館長によるプライベートギャラリートour等に加え、休日には、三國清三シェフを招いた子供向け食育イベントやクラブシェフによるお子様向けクッキングクラス等、年間 50 本以上のイベントもご好評いただいています。

④ 六本木アカデミーヒルズ

六本木ヒルズの文化施設の中で「Intelligence」を担うアカデミーヒルズは、竹中平蔵理事長の下、都市生活者に対して「知的活動の場」と「教育の機会」を提供すると共に、企業・団体の「情報発信(MICE)の場」を提供してきました。

「教育の機会」として、最先端のビジネス情報を提供するセミナー「六本木BIZ」、企業家精神を養う「日本元氣塾」、真のグローバル人材を目指す「石倉洋子のグローバル・アジェンダ・ゼミナール」、都市生活者の感性を磨く「六本木アートカレッジ」「アーテリジエントスクール」などを開催しています。

「知的活動の場」として、会員制ライブラリーを開設し、現在会員数約3,300 名。会員の4割を占める30代が中心となっておりますが、20 代から70 代まで幅広い年齢層の方にご利用いただき、新たな情報を得、人と出会い、そして新しい知を生み出すイノベーションの場を提供しています。

「情報発信(MICE)の場」として、国内企業のみならず、グローバル企業や外国政府機関などの国際的な会議やセミナー、発表など多様なイベント用途で数多くご利用いただき、東京のMICE拠点としての一翼を担っております。

開館からの10年間で自主外部あわせて計約20,000 件の催事が行われ、延べ約350万人の方が来館されています。

◆ グランド ハイアット 東京

グランド ハイアット 東京では、ライフスタイルディスティネーションとして、開業以降 10 年を通じて、大規模な国際ミーティングやイベント、国内外のVIP など、多くのゲストをお迎えしてきました。

2011 年 3 月の東日本大震災以降も、六本木ヒルズの自家発電や街全体の安全対策が高く評価され、他のホテルに比べビジネスの回復が早く、さらなるお客様へのサービス向上を目指し、全客室、エグゼクティブラウンジのリノベーションなどにも着手いたしました。そしてダイナミックな 10 のレストランとバーでのプロモーションやイベントを展開し、付加価値を強化し続けることで、経済の回復とともにさらなる、ビジネスの需要が見込まれています。

10 周年に向け、文化の発信基地、六本木ヒルズの中にあるホテルとして、その特性を生かした、コラボレーションにも注力し、森美術館の「LOVE 展」や森アートセンターギャラリー「ミュシャ展」とのプロモーションを積極的に展開していくことで、ライフスタイルディスティネーションホテルとしてのユニークなポジショニングの確立とさらなる、お客様の満足度向上を目指してまいります。

◆ TOHOシネマズ 六本木ヒルズ

TOHOシネマズ 六本木ヒルズでは 2012 年度に開催しました「アメイジングスパイダーマン」「バイオハザードV:リトリビューション」の世界プレミアをはじめ、これまで延べ 400 回を超えるプレミア上映、完成披露、舞台挨拶などのイベントを開催しました。また、東京国際映画祭をはじめ様々な映画祭の会場となり、映画文化の情報発信基地として映画業界をリードしております。

近年は人気アーティストのコンサートや演劇、スポーツの中継などのオルタナティブ・コンテンツや午前十時の映画祭をはじめとした名作上映も積極的に開催、年間を通じてお子様からシニアまで様々な年齢層のお客様にお喜び頂いており、おかげさまで 10 年連続で年間来場者がミリオンを突破いたしました。

本年は 10 周年記念作品として世界的な現代アーティストである村上隆初監督作品の「めめめのくらげ」を 4 月 26 日より公開致します。また、上映期間中となる 5 月中旬まではエントランスからロビーに至るまで巨大な「くらげぼう」バルーンや映画のキャラクター「ふれんど」達があしらわれたビジュアルで村上隆ワールド一色となっております。

今後もTOHOシネマズのフラッグシップとして映画文化、映像産業の新しい情報を発信し続けてまいります。